
大好きな彼、大嫌いな彼女

春海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きな彼、大嫌いな彼女

【Nコード】

N8789F

【作者名】

春海

【あらすじ】

ずっと思い続けていた彼が、大嫌いな女と付き合っていたと知ったら…。女がズルいのか、男がバカなのか。

タバコを吸う人は絶対に嫌だと言っていたのに。
時間にルーズな人は信用できないと言っていたのに。
顔はかつこいいけど中身は最低だねと言っていたのに。

なんであんとタケシが付き合ってるの。あたしが知らない間に。
あたしの大好きなタケシとあんなが。

男に媚びを売るマミ。

男と女の前では態度の違うマミ。

自分の話しかないマミ。

みんなの前でだけ良い子ぶるマミ。

嫌いな友達には挨拶もしないマミ。実は厚化粧のマミ。

男を口説くのが得意なマミ。

なんであんたはマミなんか惚れたの。あたしがいるのに。こんな
にあんたのこと大好きなのに。

「聞いたよ。マミと付き合ってるって」

紙パツクのピーチティーにむせながら彼は答えた。

「は？誰から聞いた」

「それは教えない。何で半年も隠してたの」

「別に隠してたわけじゃ…」

「まあいいけど。ねえ、一個聞いていい？どこを好きになったの」

真っ黒い前髪をいじりながら彼は

「わからない」と答えた。

外は寒くなっていた。

こうして2人で歩いていても楽しいのはあたしだけなのかな。あたしと歩いている今も、タケシはマミと一緒にいたいと思っているのだろうか。

大学に入学して成り行きで入ったサークルでタケシに出会った。マミも同じサークルに入った。

1年の頃あたしとタケシは仲が良くて、いつも一緒にいたり、夜に長電話をしたりしていたのに。2年になってあたしはバイトが忙しくなり、あまりサークルに顔を出さなくなっていた。タケシのことは1年の頃から好きだったけど、ずっと気持ちを伝えられないままだった。そして気づけば…

考えれば考えるほど、わからなくなることがある。

なんでタケシはマミを選んだの。

あたしはどこで間違えたの。

「あたしたちのこと知ってるんでしょ」

ちつとも優しくない目をして彼女はあたしにこう聞いた。

昼休みの食堂はガヤガヤしていて落ち着かない。

「うん。聞いたよ」

「あーもう。あんたにだけは知られたくなかったのに」

「何で？何であたしに知られたくないの」

あたしは精一杯、これっぽっちもマミのことを悪く思っていない女を演じていた。

「だってあんた、タケシのこと大好きじゃん」

「はあ？全然そんなことないけど」

うそ。でもここで素直に言ったら負けだ。

「ほんとに？ならいいけどさ」

3限の授業が始まる頃、あたしたちは分かり合った。フリをしていた。お互いに。

あたしが半年間も彼らが付き合っていることを知らなかったのは、2人がそれを避けていたからなんだ。あたしがタケシのことを振り向かせたいと思って取る行動全てが、彼らにとっては2人の間を邪魔するものでしかなかったんだ。

広い廊下の真ん中で、この半年間の記憶がフラッシュバックする。タケシを好きになってからタケシを想わない日はなかった。タケシを好きになってからのあたしの記憶は、タケシを想う感情でしか表せない。

今まで鮮やかな色をしていたあたしの片思い日記は、ちょうど半年前から灰色に染まっていった。

大好きな人を想うことで、大好きな人の幸せを邪魔していたなんて。

授業が始まり、教授がつまらなそうに話し始めた頃、あたしはケータイのフォルダからタケシの画像を全部消した。

あたしは彼の幸せを願う。

そう心に決めた。

窓から見える青がどこまで果てしなく高く、あたしの気持ちとよく似ていた。

それから2ヶ月経ち、コンビニではクリスマスソングが流れ始めていた。

タケシとマミの仲がうまくいっていないのを聞いたのは、サークルの友達との飲み会の買い出しに出てる時だった。

飲み会にはタケシが来ていた。お酒の弱い彼は缶チューハイを二杯飲んで顔を赤黒く染めていた。あたしは飲んでも飲んでも酔えずにタケシのことを見てばかりだった。

夜中の3時を過ぎたあたりで、みんなが口々にアイスを食べたいと言い出した。でも誰も立ち上がるうとせず、結局ジャンケンで買い出しに行く人を決めることになった。

負けたのはあたし1人だった。1人じゃ危ないからとタケシが付いてきてくれた。

しゃがんでスニーカーを履くタケシの真つ赤な首を見て、

「あ…あたし、こーゆうところが好きだったんだな」と思い出す。

街灯の光が空気に溶けて綺麗だった。

タケシの目はいつもと同じようにまっすぐを見ている。

ふいに、嘘だ、と思った。

タケシとマミが付き合ってるなんて嘘だと思った。

タケシがマミのことを好きになるはずがなかった。

だってタケシはあの時と全く変わっていないから。

コンビニの明かりが見え始めた辺りで、あたしは言う。

「マミのこと好き…？」

タケシは下を向いたまま時間をかけて

「うん」と頷く。

「あたし…あたし、タケシが好き。1年の時からずっとタケシが好き」

辺りはしんとして、街全体があたしの言葉を聞いているみたいだった。

タケシは下を向いたまま動かない。

あたしは無意識に流れた涙を無意識に拭いた。

「好き。絶対好き。マミなんかヤダ…」

声がかすれた。

急に体が狭くなって、苦しくなった。

タケシがあたしを抱き締めていた。2人の体は驚くほど熱く、耳の先だけが凍ったように冷たかった。

タケシは一回鼻をすすると、キスをした。

長くて短いキスだった。

タケシの舌からはカシスオレンジの味がした。

アイスを買ったあと手を繋いで帰った。

あたしの大嫌いな彼女が大好きな彼は、今あたしの隣にいる。

あたしの大嫌いな彼女が大好きな彼は、今あたしの彼氏になろうとしている。

そして、あたしの大好きな彼は、あたしのことを大好きになり、あたしの大嫌いな彼女は、あたしのことを大嫌いになる。

（後書き）

あたしはこのストーリーが現実になる事を望んでいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8789f/>

大好きな彼、大嫌いな彼女

2010年10月28日04時23分発行